

季刊 連句 第18号

昭和六十二年九月一日発行



季刊連句 第18号 目次

嶋立庵今昔（南柏雜記 16）…………… 1  
 連句のことなど……………草間 時彦………… 2  
 「市中は」の巻 鑑賞（IV）……………東 明雅………… 6  
 歌仙の首尾時間……………杉内 徒司………… 8

二十韻・評価と批判……………	草間時彦・高藤馬山人・鈴木春山洞 小野寺妙子・大畑健治・星野石雀	10
----------------	-------------------------------------	----

絶頂の城（最終回）……………14  
 芭流朱連句会作品（二十韻）……………鈴木 春山洞 捌…………16  
 興流連句会作品（歌仙）……………馬場 彬風 指導…………17

おくのほそ道紀行 俳諧のたねのこぼれて……………	秋元 正江…………	18
二十韻 四巻……………		20

暮雨巷に由縁の衆と俳諧興行……………式田 和子…………22  
 第二十二回 猫蓑会……………25

捌 氏原 正雄 大窪 瑞枝 式田 和子  
 杉戸 金一 高瀬 美保 中川 哲  
 余興三巻 麦酒注ぎ 副島久美子捌  
 紅蜀葵 膝送り  
 巴里祭 膝送り

沙羅の会……沙羅の昼・沙羅咲く・合歓 膝送り……………28

新刊紹介	橋間石 著「橋間石俳句選集」……………	13
	草間時彦 著「淡酒亭歳事記」	
	桜井天留子 著「二人静」	
	馬場東夷 著「春障子」	

質疑応答……………21  
 雁帛往来・連句会案内……………29

# 鳴立庵今昔

## 南柏雑記 16

雅

鳴立庵はJR大磯駅から徒歩で五分程の地にあり、このたび大磯町では大金を投じて、修理改築した。もともと、このあたりは昔はこよろぎの浜に続く景勝の地で、鳴立沢と呼ばれ、彼の西行が「心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕くれ」と詠んだ処だとされている。

庵はその昔、寛文四年（一六六四）のころ、小田原の崇雪という人が、はじめてこの地に草庵を結び、鳴立沢の標石を立てたというが、その標石も崇雪の墓標も現在残っているそうである。

その後、三十年ほど経って元禄八年（一六九五）、紀行家として知られ、俳諧師としても有名であった大淀三千風が、庵を再興して入庵した。これが鳴立庵の第一世の庵主とされている。その後、三世の鳥酔（一七六九没）、五世の白雄（一七九一没）、八世の葛三（一八一八没）など、春秋庵系の有名俳人が庵主となつて、庵の名を高からしめた。それからもずっと続いたが、昭和になつてからは、十八世鈴木芳如（在庵二十年・昭和四十七年没）、十九世山路閑古（在

庵十五年・昭和五十二年没）、二十世村山古郷（在庵十年・昭和六十一年没）と、それぞれ特色のある一流の俳人が庵主となり、鳴立庵の権威を高めたのであった。

私は芳如さんには、昭和四十六年、第一回俳諧時雨忌の時、一座した記憶がある。当時八十八歳の老嫗だった芳如さんは、小さくて細くて折れそうな体の中に、火のように熱いものを持つておられ、出された恋句の激しさにびっくりした思い出がある。閑古さんは都心連句会の方で、私も都心連句会とは親しかったからたびたびお目にかかった。閑古さんは「鳴立庵記」という二百五十頁余りにわたる連句入門書を書いておられ、一方の大家だった。古郷さんとも私は面識はあり、著書も多くいたのだが、古郷さんは連句には、御関心がなかったようだ。

それをとやかく申すわけではないが、新しい鳴立庵主はやはり連句の出来る方、すくなくとも分る方が望ましいと思つていたが、今度、俳人協会理事長の草間時彦さんが新しい庵主になれる由を承わり、躍り上がる程嬉しかった。それは私の希望通り、現代の俳人で、これほど連句を理解し、また堪能な方はないからである。この人を得て、三千風以下、歴代の庵主たちもさぞかし喜んでおられることだろう。早く御入庵のお祝いを賑かにやりたいものである。

祝 主得て鳴立庵の秋麗ら

明雅

## 連句のことなど

草間時彦

このごろ、連句が面白くなって来た。連句の会というところ、用をささくって出掛けてゆく。半日たっぷり、たのしむ。連句が面白くなったのはいつごろからかというところ、私の俳句と関係があるようである。少し、俳句のことを書かせて貰うと、私は水原秋桜子、石田波郷の門である。昭和二十八年、長らく休刊していた「鶴」が復刊した。私は「馬酔木」を脱して、「鶴」に参加した。私の周辺にはよい俳句の仲間がいた。小林康治、川畑火川、岸田稚魚、細川加賀、山田みづえ、まだまだ、たくさんのサムライがいて、当然、いくつかの句会があった。それらの句会は、それこそ、何でも、自由に、遠慮なく、物のいえる句会だった。私は、そういう場で育った。

幸福な期間は十五年ほど続いた。昭和四十四年、石田波郷が死ぬと、「鶴」の空気が、少しづつ、変っていった。やがて、俳人協会の俳句文学館建設の仕事が始まり、私はその専従になった。三十年近く居た会社を捨てることに、それほどの躊躇もしなかった。

俳人協会専従になった以上、無所属となるべく、「鶴」を脱けた。これも、二十年お世話になった「鶴」だが、未練は

なかった。石田波郷のいない「鶴」は、それほどの魅力がなかったのである。

無所属になると、出席する句会がなくなってしまった。初めは、さばさばとして、気楽だったが、やはり、淋しかった。たまに出席する句会があっても、師匠格で出席するので私の句に対して率直な発言や批評などは存在しないのである。一つには私が世俗的な意味での俳句の上で偉くなってしまったからである。もう一つには、そのころから、俳句に女性が増して来た。今迄の「鶴」の句会は男ばかりで、女性の姿は寥寥たるものだった。だから、何を言っても平気だった。女性が多くなると、句会の発言の尖鋭度が鈍化してくる。私にとって、句会は楽しいものでも、役に立つものでもなくなってしまった。

そういうときに、連句が私の眼前に現れた。連句とは、それからの仲である。

私の連句は独学である。古典を学ぶことから始まった。実作は独吟から始まった。

俳句では水原秋桜子、石田波郷が私の師系である。連句の場合は師系がない。私の連句はどうなのかと言うなら、



飽くまでデイレッタントである。作品については唯美主義である。そして、俳人として、連句から距離を置いて、連句の姿を見ることが出来る。連句はたのしい。しかし、そのたのしさと何かということにも、同じように興味がある。

デイレッタントということは、三十六句が満尾に近付いて行く共同作業の作詩過程に、もっとも興味が集まる。作品を後世に残そうというような心は毛頭ない。

そういう私が、連句についても言うというのは、どんなものであろう。

しかし、自分勝手な発言になると思うが、最近の連句界のいくつかの問題を、デイレッタントの立場から気付いたことを言わせて頂こうと思う。

連句は時間がかかり過ぎるといふ声が多い。その通りだと思ふ。

二時間少して出来るとよいという。それは、仕事のあとの夜の時間を連句に向けるからである。六時から九時までの公民館などの会場の貸時間と一致する。

明治、大正の句会の時間を見ると、大体、一日がかりである。午前十時ごろから開いて夕方まで。途中で、店屋もの弁当や井を取る。午後一時過ぎにはじまると、夜までである。

東京での町の運座だけは夜だった。これは出席者が職人衆だったり、お店の番頭さんだったりするからである。そ

の代り、夜は十一時、十二時になった。誰もが歩いて帰れる距離に住んでいるのである。

夜、六時に始まり、九時までに終る連句の会を見ると私は情なくなる。王候貴族の遊びの連歌の末裔の連句が、何故、そんなに急がなければいけないのであろうか。もっと、ゆっくり出来ないものだろうか。結局、日本人は働き過ぎることなのであるうか。

私は連句の面白さの一つに、終ったあとの雑談があると思っている。興奮が少しずつ覚めてくる。酒をふくむのもよい。甘いものをつまむのもよし。三十六句、座を共にした心易さと親近感が、座のわけへだてをなくして、自由なおしゃべりが出来る。

文台引おろせば即反故なり

つまり、反故になつてからのたのしさだ。この雑談に参加出来ない人は、連句人の資格がない。

挙句が出て、満尾するかしないかのうちに、「電車の間がありますから、お先に失礼します」

では、どうにもなるまい。しかし、それでも三十六句は出来る。活字になった歌仙を見る限りに於て、そそくさと席を立った人がいるのか、いないのかは判らない。

結局、連句の面白さは作品にあるのか、それとも、作句の共同作業にあるのか、どちらかということだと思ふ。

私は、いつも申上げることになっている。

「連句はゴルフと同じだとお考え下さい。ゴルフは朝、出掛けて、夜に帰る。一日がかりでしょう。連句も一日が

かりの遊びなのです。

ゴルフは肉体の体操。連句は脳細胞の体操です。」  
そう言うのと、何か判ったような気がするらしいのである。

連句の時間を節約しようという試みは、百吟を三十六句にするときからだ。百吟の時代、もっと以前にも行われていたに違いない。その短縮作業が三十六句で止まるのか、それとも、二十句、十八句に進むのか、それは今、云々するのは少しばかり早過ぎる。もう少し、実作の積み重ねを見なければなるまい。

私は、歌仙の場合、それなりに短くすることを試みている。ただし、連衆が顔見知りで、いつも同座している者ばかりのときに限るのだが、オモテの一巡のところを文音で、前もって作って置くのである。文音といっても電話で済ますことが多く、TELS音だ。知らぬ顔や初顔合せのときは、オモテはそれなりに意味があるので、文音はいけないが、「いつもの顔ぶれ」ということだと、こういう手段に役立つ。内緒で捌が代作するのも容易で、当人に恥をかかせないで済む。

それから、出勝の場合、用いなかった付句の短冊のうち、あとで役に立ちそうなのを残して置いて、名残も進んで、そろそろ、連衆の脳細胞が疲れ果てたと思うあたりで、用いる。不思議によく付くのである。

捌は三十六句の進行中、いつも、連衆の疲れ具合や、気分を見ていなければならない。三十六句が終るころに疲れ切ってしまうように仕向けるのが、捌の醍醐味である。二

十五句目ぐらいに疲れて智慧が湧かなくなってしまつては、その歌仙の座は失敗なのである。

連句をやると、俳句が下手になると言う説がある。私は、その説を全面的に否定はしない。人には水平思考型と、垂直思考型とがある。俳人もそうである。垂直思考型の人は連句に向いていない。このタイプの俳人が連句をやっても、連句はうまくならないし、連句そのものが面白くないである。結局、連句から離れてしまうことが多い。

それでは、水平思考型の人はどうかというと、連句をやっても俳句が下手になるといふことはないと言いたい。連句が俳句にプラスになっているかどうかは判らないが、少くともマイナスはないと思う。

ただ、ここで気付かなければいけないことは「連句をやると俳句が下手になる」という言葉は、俳句を五年十年とやっている人を指しているのである。しかも、その俳句は、きちんと基礎が出来ていて、切字を使う技術も心得ている人なのである。つまり、発句の出来る人なのである。そういう俳句を作っている人が、たまたまの出来心で連句と馴染んだら、俳句が下手になると言うのが、この言葉の本旨である。

さて、現代の俳句を見てみると、いろいろなことが言える。第一に、現代俳句は急速に発句性を喪失しつつある。切字の権威の失墜である。切字を使える作品が少なくなつたこと。それと同時に、もっと注目したいのは、切字を理

解出来る人が少なくなつたことである。芭蕉の「古池や」の句の「や」が判らず、「古池に」と同じに解する人々が多くなつたことである。

連句の場合、平句は、切字を持つことを許されないという理由でいつも、発句に対して劣等感を持っていた。もし、切字が権威を失つたとき、歌仙の場で、発句は平句三十五句を引き連ねて行くことが出来るのかどうか。

そのあたりに、明日の連句の危機があると考えたい。

それにしても、現代俳句には、連句の平句をそのまま、俳句と称したような句が多過ぎる。いつ、そうなつてしまつたのか、殊に目立つのは、最近十年ほどの現象である。そういう、切字を用いない、平句まがいの現代俳句作者が、連句を試みたとき、「俳句が下手になる」かどうかであらう。

「連句をやる」と俳句が下手になる。は、長い間、連句界の問題だった。だが、もう、この問題は捨てた方がよい。それに代る新しいことは、

「俳句をやる」と連句が下手になる」である。下手になるか、どうかだ。

今の連句界には俳句の修業をした人が少ない。つまり、発句の出来ない連句人が多いことである。

男が居る。(女でもいい)俳句も連句も全く知らないが、文学には若干の興味がある。それが、たまたま連句にさわられた。俳句は難しそうだ、連句は面白そうだ、参加したのが病み付きになつた。うまくなつて、捌をするようになると、発句を乞われることもある。俳句は出来ませんからと断るのはくやしい。そこで、俳句を学ぼうかと志す。しかし、誰に学べばよいのか、どの結社に入ればよいのか、俳句の雑誌を開いて、作品を読んでも、一向に、発句らしいのが見当らない。困っていますと、彼は言う。

そういう人にこそ、「俳句をやる」と連句が下手になる」かどうかが問題である。

私は、本稿で、現代連句の発句はどうあるべきかを考えてみたかった。だが、もう、与えられた紙数も尽きた。別の機会に考えることにしたい。

(未完)

## 武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、  
九月十日(木)までに提出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

「市中は」の巻鑑賞(Ⅳ)

東明雅

8 湯殿は竹の簀子佗しき

9 茴香の実を吹落す夕嵐

(秋。人情なし)

(現代語訳) 竹の簀子を張ったわびしい湯殿の外は、夕嵐が吹いて茴香の実を吹き落している。

(付心) 其場・天象・時刻の付け。

(付味) 前句の「簀子わびしき」から秋の冷気を感じと

り、それに夕嵐に散る茴香の実の風情を思い寄せた。茴香

の香は湯殿にうつりよく、湯を浴る頃の夕なるにも叶い、

両句相俟って品のよいさびしさを実感させる。「秘註」に

「前句ノ寂ヲ受テ助ケタル付也。湯殿ニ夕嵐ハ句ナリ」と

あるが、このように、前句にしつとりした付句を付けるの

は、「猿蓑」の独自の境地と言ってよく、すばらしい付句

である。

(転じ) 打越ははなやかな恋句、これはわびしい叙景の

蕉 来

句で、気分も状景も全く一転している。

(補説) ここに秋の句を出したのは、花の定座に、月を

出そうとする意図からで、それは裏の三句目に花を出した

時からの予定であろう。そうなれば、前句に「簀子わびし

き」という句を出したのも、秋の句を次に出し易いために

敷かれた路線であると考えられる。このように、芭蕉の俳

諧は何句か先を常に考えて付けられているのである。(夕

嵐は異時分を嫌わず、月を出してよい) 脇の句以下、人情

の句が続いたのを、前句で断ちきり、さらに言えば「逆志

抄」が言っているように、「外へ引出し変化したる也」|| 内

の句が五・六句続いたので外の景に転じたところもよい。

9 茴香の実を吹落す夕嵐

10 僧や、さむく寺にかへるか

(秋。人情他)

来 兆

(現代語訳) 茴香の実が風に吹き散って肌寒を感じる夕暮れ時、托鉢の僧は自分の寺に帰って行くのだろうか。

(付心) 起情の付け。「夕あらしに僧の寒さうなるを見出しの付也」(「注解」)。右で起情の説明は十分である。「逆志抄」には前句を寺の庭と見て、それを寺と断らず、只僧を付けたと言ひ、宮本三郎氏は「茴香という薬種のしをり(余情)から禅僧の気味が浮かぶ」と説き、露伴は「蒼苔路滑僧帰寺 紅葉声乾鹿在林」という温庭筠の詩(朗詠集)を典故とする。

(付味) 能勢朝次氏は「やゝ寒く」の一語は、誠にこの一連に点晴したものであって、秋暮を吹きつくす嵐の冷寥さとあわれな僧の寒い感じが、この一語の中で微妙に言いとられつくしているを感じる。僧という言葉から受ける感触から、「やゝ寒く」の感じへ、更に「寺にかへるか」と続く余韻のつづきなど実によい。「かへるか」のかと言つた疑問的咏嘆の語が、淋しい余情の流れを最後でぐっと堰き止め湛えて、はりきつた力を感じさせる所など、また味わうべきであろう——として付味を「ひびき」としておられるのは、全面的に賛成である。

(転じ) 人物、場所は転じているが、寂寥・悲愁の気分は変化していない。

(補説) 草稿には「山に帰るか」とあるが、山は寺を指す語とは言え、前句の茴香に対し感じとして、やはり、寺の方がなつかしく、ふさわしい。兩山が「茴香の実に言ひかすめられてゐる虚の相を、托鉢若しくは行脚の僧の実の

姿に付け現はしたもので、芭蕉俳諧に於ける象徴的手法の最も鮮明な一例である」と言っているのも至言である。

10 僧やゝ寒く寺に帰るか

11 さる引の猿と世を經る秋の月

(秋。月の句。人情他)

蕉 兆

(現代語訳) 托鉢を終つた僧はひとりやや寒の寺に帰り猿と身すぎをともにする猿引は猿と月を眺める。ともに世外者の生活の姿である。

(付心) 向付・対付。観想。「三冊子」にこの例をあげ、「二句、別に立ちたる格なり。人の有様を一句として、世の有様を付とす」とあるが、前句の貧僧に対し、しがたない猿引という別人物を出した向付。ともに世のアウトサイダーを描いた点で向付の中でも、対付に近く、漢和聯句の手法(折口)とも言われる。

(付味) 曲齊は「街道の観想」と言ひ、露伴も「両者の行きあひたる何とおもしろし」と言っているが、もちろん、現実の道ですれちがった景を写したのではない。ただ、観想の句であることには違ひない。能勢氏は「両者は全く別種のものながら、漂泊する身のわびしい寒さが両者を結び、寂寥の気を充分に此句にうつし得ている」として「句ひ」の付けと見られている。

(転じ) 同じく能勢氏は「打越と前句の間には冷寥蕭殺のすさまじさまで感じられるが、この付句に於て、猿引を黠出したために、前句と此句の間には、俳趣をおびたやはらぎの感が加わっている」と言っておられるが、賛成である。

## 歌仙の首尾時間

杉内徒司

歌仙一巻の首尾時間を短くする工夫をいろいろ検討したのは、会場の料亭「いろは」(東京都港区青山)が五時からすきやきを始めたというからである。五時前に首尾するにはどうすればできるか。

捌きが芭蕉の冬の句から立句を選んで、脇句を考えてきてもらう。

当日は第三起りで一時から始め、五時に首尾することは二四〇分に三四句を作句することであり、七分に一句治定すればよい。開会の辞などはごくごく簡単にすませ、とにかく巻き始めることだ。

義仲寺の大庭勝一氏との雑談の中で、俳諧時雨忌をやってみようと話がでたのは春ごろだった。案内は義仲寺関係十名、私の関係で三十名、併せて四十枚出して三十人は参加するという見通しをもった。

現在各種の連句大会で行われている小グループに分かれて連句を巻くこのパターンは、小人数ですきやき鍋を囲むことから便宜上思いついたのかも知れない。それまでこの種の連句興行では出席者がグループに分れる事なく、全員

で一つの俳諧を巻くことが普通とされていたからである。

今考えると何でもない事も戦後初めて、或は昭和初期初めての催しだというので計画を進めるにはいろいろの試行錯誤を繰返したが、特にスピードアップの点では工夫を凝らして興行した第一回俳諧時雨忌(昭和46・10・10)はどうやら計画通りに終了した。これを契機に発足した義仲寺連句会系統は首尾時間四、五時間が常識となっている。

当時義仲寺連句会の連衆は最も数が多く、それぞれ行動力があつた方が多かったので各方面に亘って影響を及ぼした。

さて、この作句時間にふれた著作は余りないが、「昭和俳諧式目」(昭和18年制定)の第三項には次のような記述がある。

連衆は一座の芸術的興奮を尚び、常に即吟を心がけ、時間を守り濫りに一座の空気を妨ぐる如き動作あるべからず。

この式目制定の推進者の一人である伊東月草(「草上」主宰)は著書『連句大概』(昭和21・9)に「常に即吟を心

がけ、時間を守り」とありますが、一句に費す時間は十分というのが大体標準であります。毎句十分づつで締切り、出勝ちの方法でやりますと、題を出されて俳句を作るのと大差のない努力で結構できてゆくのではありません。と説明されている。作句だけの所要時間が六時間となるが、捌きの治定時間が一句何分を基準とすべきかにふれていないのが惜しまれる。

この場合、出句に十分、捌きが治定に五分づつかかること、治定所要時間が三時間だから併せて九時間——二日がかかりで一卷満尾するという例も実際多く行われていると思う。私が再び首尾時間に工夫をこらしたのは心敬五百年忌俳諧興行（昭和56・4・19）準備の頃だ。心敬忌はその五百回忌（昭和49・4・29）に第一回が興行されたが、翌年は細々と興行されたもののそれ以降は中絶されていた。この会場は神奈川県大江山麓の洞昌院のため都心からは往復の時間がかかるので、三時間で首尾できればと思ったのだ。ところがその準備期間に、鶴屋南北の没後百五十年を記念して南北忌が催される事になり、それを協賛して連句興行もする事になった。

その南北忌（昭和55・11・27）の記念講演に、河原崎国太郎が、芝居は二時間以内になければ観客に飽きられて仕舞うからだめです、という点に、首尾時間を考えていた私は深い印象をうけた。

そんな事があったので、それ以来は歌仙首尾時間は三時間を目標とし、一句の作句、治定併せて五分を基準と考え

るようになった。

然し、五分というのはこまかすぎる計算で実際的でないので、三時間を面毎に配分し次のような腹つもりでやっている。

表 六句 三十分 裏 十二句 一時間

名残表 十二句 一時間 名残裏 六句 三十分

第四回連句懇話会全国大会（昭和62・6・14）では実作の時間が二時間であった。連衆の顔ぶれをみて打診すると、半歌仙では未完のうらみが残り、二十韻では時間が余りそうなので、思い切って歌仙を首尾してみようと始めて首尾したが、捌きの身には少々きつかった。二時間では作句、治定の楽しみが薄れる、歌仙にはやはり三時間が欲しい、必要だ。

私は今迄必要に迫られていろいろ時間について考え実行してみても現在は三時間を信奉しているが、他人に三時間説を強要するつもりはさらさらない。連衆に時間の余裕が充分あり、部屋の使用時間に制限がない連句会は三時間で切上げる必要はないし、時間一杯使ったいい作品をつくって楽しめばよい。

ただ現在は大勢が一堂に会し、他門と一緒にあって小グループに分れて巻く機会が多くなっているから、二、三時間で首尾できる経験をされた方がよりいいではないかと思っているだけだ。三時間首尾は捌きの考え方如何に依るが、現在三時間がよいと考えてる連句作家が何人位いるだろうかを考えるだけで私は満足している。

## 二十韻・評価と批判

### ◆「青しぐれ」を推す 草間時彦

「連句」に発表された二十韻のうち、一篇という、福井隆秀さんと坂本孝子さんの「青しぐれ」（十一号 第二回武翁賞作品）がよいと思います。

二十韻は歌仙のミニアチュアでなく、運びも独自のものがなければいけない。そんな気がします。実作を積み重ねてゆくうちに、新しい美が生れるでしょう。焦らない方がよいと思います。

### ◆二十韻 高藤馬山人

わたくしはすでに老骨で、歌仙以外にこのごろの新しいところみの連句形式に不案内なので、御下命の二十韻の感想や批評など場ちがいの感じがして、とまどいました。恥をかくつもりでめくら蛇の気持で、――

季刊連句第十七号は「藤」の特集のようになつていたので、それに惹かれて、この

七篇の中からわたしは馬場彬風柳の「藤波」一篇を選びました。二十韻の式目も約束も知らない私が気ままに選んだものですから見当はずれかもしれませんが。

この連句一読していちばん素直に読めたことが第一番に挙げた理由です。年をとるとこのごろのカタカナ交りの新語は耳にも目にもなじみ薄く、理解に苦しむことも多々ありますが、この二十韻には、サミットとロッキードという定着した固有名詞だけなので、そういうことも原因だったかもしれません。

まず初めの四句のすべり出しもおだやかにすべり出して難無く、ウラの恋のわたりにうまい工合に乗っかっている感じになっています。そして、その恋離れもサミットの時事句が唐突のようであり、「ためらひつゝも押せる爪印」にあざやかな切れ味として美事でした。

ナオの六句のはこびも飄逸な付合が好もしく、なかなか変化に富んでいて、しかも

それがひとりよがりでなく、自然に流れていっているように思われました。

名残のウラでひまごやしやごと賑やかな子供が末広がりに出てきたのも一巻のおわりとしてまことにこの一巻をめでたく巻きおさめていくのに効果的だったと感じました。

### ◆二十韻讃歌 鈴木 春山洞

季刊「連句」創刊号誌上で東明雅先生が「連句が将来いかに変化変貌しようとも、絶対に失ってならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムである（同誌8頁）」と喝破されて以来、わたくしたちは、その現代連句観にある明るい自由な達観を加え得た気持がして、徐々に、わたくしたち自身が希求してやまない、それぞれの方向を模索的ではあるが辿り始めている。

折りしも現代連句は、永い沈滞期・連句暗黒時代を経て、何度目かの爆発的ブーム



を繰り返して、ようやく連句復活期を確かなものとしていた。連句を志すもの・連句実作者たるものは、その連句を、もっと大切にすべきだと思ふのだが、現代は慌しい時代である。師走ならず駆け廻る時代である。その時代の急激な流行にマッチして、「歌仙」より短い形式の連句が各所で提唱されている。それはそれで喜ばしいことであり、現代連句は斯くして発展するのだろう。その群雄割拠の中に明雅先生の「二十韻」が提唱された。「二十韻」に共鳴し讃歌を奏する所以は、連句は我等日本民族の独自の文芸形式であり、日本文学の持つ伝統的なもの（不易なるもの）を襲蔵しているものである。大流行した「百韻（四折）」から脱皮した「歌仙（四面）」が、今や更に脱皮して「二十韻（四面）」となり、現代人の生活にマッチした連句として受け入れられつつある。芭蕉が「歌仙」を振り翳して蕉風を樹立し俳諧文芸を大成し風雅の誠を追求したように、明雅先生の「二十韻」は現代連句にして出来る俳諧の新風を喚起するものであり、この「二十韻」を定植育成して花咲かせるものは現代連句作家であるわたくしたちでなければならぬ。更には来

るべき世紀の連句界を展望して「二十韻」を正しく伝承させ百花繚乱の世界を具現させるものもまた、只今の現代連句作家の取り組み方、創作作品のあり方にかかっていると言わねばなるまい。

季刊「連句」の中の、夥しい、素晴らしい作品を再三読み返して、今更のように目移りして困った。（第14号27頁下段）の「返り梅雨」をいただくことにした。折からの返り梅雨を狭庭に見てのことである。全体として都会的な瀟洒な作風・雰囲気を漂わせているあたりは、素晴らしいという外はない。野暮な田舎者を魅了し眩感し切って憚らないものがある。前の恋と後の恋の変化が面白い。

### ◆ 新連句に関して 小野寺妙子

一花二月、二十句による新連句は季刊「連句」では毎号おなじみとなり楽しく読んでおります。歌仙の重厚感をやや欠くとしても、現代生活にはびつたりの形式です。

現代は時間にしばれがちの毎日、日常の忙しさから解放され一日がかりでゆるりと連句を楽しむのが望ましいのですが、連句の中には時間のとれない人もいます。時

間的に言うならば、歌仙一卷四時間でもなかなかで巻残してしまいます。次回に持越さず首尾し、歌仙の味わいをも持たせるのにこの二十韻は大変うまい味のある形式だと思えます。

最初は歌仙形式で基礎をマスターし面白味を十分会得したら二十韻を楽しみ、いつでもどこでも手軽に首尾するのが自然かと思えます。第十号に二十韻の愛称公募について、雪が入った二十韻を「小面」と呼ぶならすばらしいとありましたが、私も、折角の新形式だから、雪も一卷に一句、冬の所で入れるとりきめがあったら面白いと思えます。

関東関西以南の方々には実感が少なくて気の毒ですが、以北に住む者にとって、月より季節感に富み雪の自然程すばらしいものはありません。この季節を越さねば春も花も迎えられないのだという思いで暮らします。月・花と同様に格上げしては如何なものでしょうか。

新連句と言えば三十年代仙台で飯田岳楼氏が発行していた連句誌で、歌仙と共に新連句も盛んに行われておりました。序曲四句、本曲八句、終曲四句のもの、又一楽章

長短短短短短、二楽章長短短長短短、三楽章長長短短の句並びのもの、第一楽章雪、第二楽章月、第三楽章花の楽章テーマのもの等、作品番号第〇番、〇〇指揮と捌も呼名が変えてあります。最終的には長短短のくり返しから変化して長短短短の短が七五になり次に七五、七五、七七、七七となつて浄瑠璃調をとり入れたりする所まで遊んだようです。式目にこだわらず、付味のみを重んじた新連句でした。

短歌の若手、俵万智さんの「サラダ記念日」が話題になっています。読者の大部分が、歌人以外の層で短歌集では例のない売れ行きとか、連句誌も一般人から関心を持たれるポピュラリティを獲得するよう発展してはしいものです。

### ◆ 『柚子』の巻 大畑健治

梅雨の最中に水不足が心配されますが、皆様は益々御壮健のことと拝察申し上げます。

去る六月十日付け御芳簡にてお申し付け賜りました、心に留まりました二十韻の提示とコメントを同封別紙にてお送り申し上げます。非才他の人の作品を云々する立場

では御座居ませんが、世間の風潮と併せて愚見を述べさせて頂きました。

二十韻は、一卷を巻く時間を現代に合わせるから生まれた形式かと存じますが、大矢数のように、早ければよいという風潮も変化してきていると思います。つまり、形式では短く、内容では焦らずに、という心得も大切にするのがよいのではないかと思われました。二十韻は短形式のため、一卷の構成が一目で見渡されます。恋句を二個所に二句ずつ出されますと、目障りになることがあります。また、月の句も初折の月を引き上げるか名残りの折の月を零すかして、変化を持たせるのも面白いかと思えます。その他季移りや季句の配置に臨機応変な処置を取られるのも、二十韻ならば容易かと存じます。折角の御発案による形式ですから、熟練者には相当自由な采配を任せられると、連句の自由さがもっと楽しめるような気が致します。

『溼東や』の巻(亀戸天神正式俳諧興行)や『夜永』(電通・山口美恵氏捌)も候補に挙げましたが、前者は正式のため除外、後者は面白いのですが「ビル」改築のムシヨ「社」美術館建つ」の居所の素材が目立ち、

「車屋の黒」がどうもすっきり解釈できません。このような訳で、『柚子』の巻を選ばせて頂いた次第です。

「季刊連句」誌の御発展と会員の皆様のお健吟をお祈り申し上げます。

### コメント

現代連句は架空と現実の入り乱れた作が多い。架空の世界で大飛躍した句が多い。これくらいの刺激がないと面白く鑑賞できないのが現代感覚であろうか。付筋もしっかりしていないため、読者も勝手に読めばいい、ということになるのだろう。その究極におけるものは恐らく西脇順三郎詩のシニールレアリスムのな実体を越えた世界であろう。逆に、これと対比的なのがベタリスムの連句である。事実は大切にするが付所の筋が曖昧で、雰囲気だけで何となく付けている、という手合いである。厄介なことに、それらの風潮——現代文芸を舐めてきた悪弊なのであるが——が、現代的であるとお題目に踊らされていることである。語句や素材の打越は避けられているものの、三句の渡りには無頓着である。連句は三十六歩皆先に進む、という意味も、後に戻ら

なければよいとばかり心得ている傾向が強い。先に進むのは前があるからである。前とは前句だけではない。打越を含めた前である。つまり、三句の渡りによる第三句目の転じが軽視されているということである。

その点「柚子」の巻（「季刊連句」第十二号）は三句の渡りが実にしっかりしている。これは打越や前句の時節・時分・天相・場・人情を踏まえた状況内容における転換を計っているからである。しかも、打越と前句との余情が前句と付句の余情に響いている。発句と脇句の温かさは脇句と第三の満ち足りた思いに重なり、第三と四句目の遥けき思いは満ち足りた思いに重なる。それは遥かなる点に喜寿の人を導き、老後の人の深き動物愛へと移る。以下この様にして余情の流れが形成されてゆく。事実あり得ることで付け進められるので、一卷に無理がない。「先に進む」とは、こうした余情の流れをいうのである。事実あり得ぬ架空の世界を持ち込むと、独断と偏見の鑑賞がそこから生まれる。「柚子」の巻は、単に二十韻としての評価のみに留まらないものを含んでいるのである。この巻の短所を強いて指摘すると、「常警津」の句から

「東郷神社」の句に至る流れがややもたついている。一座一句物の「女」が二度用いられているのは、「人」との関係で読みの違う「女（おんな・ひと）」を意識的に可と認められたものであろう。

### ◆ 二十韻感觸

星野 石雀

二十韻という俳諧の形式にはどんな功德があるのか、私流に憶測すれば、時間的に連句を愉しめる今日的な条件に合うものではないか。歌仙に慣れている人に言わせると、二十韻では何か物足りないようだが。ひと頃、私は林富士馬先生提唱するところの胡蝶を好み、やり句の存在をゆるさない、付句一句一句の詩性を大切にするゆき方に共鳴、実作的にも力をつくしていた。二十韻は胡蝶のような息苦しいほどの緊迫感はなくともすむ、遊び、風流ツギがあるようだが、私の周囲でも二十韻を試みるグループがある。私などは作句力ある連衆を揃えれば俳諧の形式は、付句の数は、さして問題にはならないと考えているが……。もともと私は二十韻を試みたことはない。だからこの種のコメントを書く資格に欠けている。

### ☆新刊紹介☆

☆「橋間石俳句選集」俳誌「白燕」の主宰橋間石氏は第十八回蛇笏賞の受賞者。また連句の達人として著名。この集は未刊句集を含む八冊の句集から成る。昭和六十二年五月刊。発行所沖積舎。定価九、〇〇〇円。

☆「淡酒亭歳事記」俳人協会理事長草間時彦氏は美食家として有名。食べ物についての雑文、江戸についての随筆などを纏められたもの。昭和六十二年五月刊。発行所立風書房。定価一、六〇〇円。

☆「二人静」猫藪会の大先輩、桜井天留子さんの俳句と文集。連句五巻を収める。第三回武翁賞の二十韻「竹皮を脱ぐ」の巻も掲載。昭和六十二年七月刊。発行所牧羊社。定価二、五〇〇円。

☆「春障子」著者馬場東夷氏は猫藪会員。共立女子大学文学部勤務。自分で捌かれたものを主に九篇の連句と評論を纏めて出版された。昭和六十二年七月刊。発行所沖積舎。定価二、五〇〇円。

付勝練習歌仙

絶頂の城 (最終回)

東 明 雅

10 ボール逃げたる野辺の陽炎  
11 相方と合はず鳴物花見幕  
十八句目

井田淳子

治定 よういやさあと春を惜しみつ

和子

1 春のかたみと矢立取り出し

千遊

2 瀬戸の明石に鯛網を觀る

3 老いの盆栽長閑なる庭

4 御室詣でて曲尺を買ひ

5 桑籠を背によぎる参道

6 鐘供養とて所化も出揃ひ

7 しづしづ臨む曲水の席

8 親子競ひて奴風揚げ

9 こうなご添へて升酒が来る

10 島原太夫傘さしかけて

11 弥生狂言師匠譲りで

12 部員勧誘まとふ春の蚊

13 骨までしゃぶり鯛の浜焼

正雄

和子

澄哲

麻子

杉亭

雅代

元子

慶力

妙子

千遊

※を「骨までしゃぶる」とは残念で、実際は骨までしゃぶったにしても、別な言い方がありそうである。14は6と同じだが、6の方がおもしろい。15これもおもしろみを狙ったものだろうが、そと春の蚤を人に移すなど、器用な人があるものである。16は病態か、17はおもしろいが、18の仏の御座で鳴物を合わせたら、仏様は御迷惑であろう。もうすこし陽気な方がよい。  
さて、これで昭和五十八年の創刊号から続いた作品も、漸く半歌仙を終ることができた。はじめた時は、歌仙一卷満尾するつもりであったが、すこし永くなつたので、この作品は半歌仙で止めることにしたい。序と破一段で終つたのは残念であるが、今までの分をまとめて掲載し、大方の鑑賞に資したいと思う。

脇起り半歌仙

絶頂の城

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鶯のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

啜る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままならず

蕪村

正江

櫻晴

東夷

隆秀

たかし

貞子

昌子

妙子

- 14 善男善女鐘の供養に 美和  
 15 春蚤ひと客に移せし 隆秀  
 16 寝たまま舞へる惜春の母 よしえ  
 17 水口祭支度早や終へ あかり  
 18 仏の御座に惜しむ春の日 治子
- 治定の句、前句にべったりだが、打越からの転じよく、いかにも長閑な、そしてちょっぴりさびしい気分がよいので頂戴した。
- 1も惜春の情はあるが、付味がいかがか。2は地名はよいのだが、「鯛網を観る」が気にかかる。3は逆付的でもしろいが、庭が野辺と打越である。4は釈教を出そうとされたのだから、「曲尺を買ひ」が何か唐突である。5も釈教の気味があるが、参道と野辺、よぎると逃げるも打越気味である。6ははっきり釈教の句で、おもしろいよい句である。「出揃ひ」とてには止めにした所など、神経が行き届いている。7は付味がいかがか。曲水の宴というもの実際に見たことがないので分からないが、前句の気分と合わない気がする。8は打越にボール投げの遊びがあるから、ここでまた風揚げしては困るのである。9は老練の句だが、惜しいことには酒も食物もすでに出ており、また、「来る」が「逃げる」の打越である。10は島原太夫が出て華やかで付味も上々である。止めが「てには止め」になっているのもよい。11はむしろ付き過ぎの感がある。12は角度をかえて新しい風俗を出したのがよい。13せっかく出た鯛の浜焼※

ばりばりと炒るちぎり菟蓐  
 角乗りを終へて筏師まづ一献

江悠々と冬靄の中

凍てる月ロシアの古都に妻とあり

為すこともなくつい鼻毛抜く

叱られて上目づかひに拗ねる犬

ボール逃げたる野辺の陽炎

相方と合はず鳴物花見幕

よういやさあと春を惜しみつ

昭和五十八年六月起

昭和六十二年七月尾

千町  
 杉亭  
 天留子

正雄  
 孝子  
 淳子  
 和子  
 遊

次号からは二十韻の付勝俳諧を始めたいと思う。その立句は次の通りである。

蓑虫の音を聞に來よ艸の庵

芭蕉

気分を一新してこれに脇句をつけてもらいたい。この句は自他半である。脇句の付け方は「連句辞典」などにくわしく書いてあるが、念のため、要領を述べると、立句の蓑虫が三秋であるから、脇は初秋か、中秋か、晩秋か決めねばならず、人情は自他いずれでもよい。月の句はなるべくなら、第三で出したい。身柄のある句を避けるべきである。締切は到着十月二十日を厳守のこと。

芭流朱連句会 二十韻 山なべて 鈴木春山洞 捌

山なべて緑し空にきはまれり

木々にかこまれ落つる滝音

丹精の盆栽庭に出し入れて

衣縫ふ糸を切る袂なり

月満ちてUFOの影あざやかに

踊りめぐれる輪をくぐるひと

もつれあふ二人に鳴子鳴り続き

恋の別れの悲しかりけり

ブリッジに五彩のテープ飛び交ひて

ピアノの恩師想ふ少女期

沖繩の鈴石に耳傾ける

西独進出TV工場

貿易の摩擦に拒否権行使され

乱れし髪を梳く白き指

愛凍てし蝶に月光濡れかかり

寒夜を走る犬の遠吠え

札所寺弘法大師杖の跡

遍照金剛笠の文字なり

花片の泛べる甘き酒を飲み

春潮の香の巻く珊瑚礁

昭和六十二年五月二十日

於 県立生活文化センター

鈴木春山洞

井門可奈女

田中拓

中野麻

古川任

子

紗

洞

奈

星

麻

任

同

奈

星

洞

麻

星

奈

麻

洞

任

春山洞

巻きすすめられると共になごやかな雰囲気が生まれて来ましたが、その中にも、ぴんと張った感じが、なかなか消えませんでした。歌仙をよりコンパクト化した二十韻独特のリズム四・六・六・四の調べが、連衆の心理に何かを齎したことは否定出来ません。でも作品の手応えは充分で、前半の恋の座の軽妙な運びに対して、後半の恋の座は艶麗の中にペーソスがうかがわれていて面白い出来栄であり、発句の「山」に対して挙句で「海」が詠われたのは初心者ながら素晴らしい話し合ったり、加えて全巻同字去りの工夫もあり、都会風ならぬ四国・松山ならではの素材も散見して、二十韻の定着感が深まっていると思われました。連句二十韻は、現代にマッチした詩であると同時に、ますます連衆の実作を通して、絶えざる現代的詩精神の追求が行われねばなりません。嘗っての歌仙を通じて、俳諧風雅の誠が追求されていったように――。

興流連句会 馬場彬風 指導

歌仙 紫陽花

紫陽花や雨欲しげなる佗び住ひ

動かぬようで動くで虫

池の面かわせみ一羽横切りて

カメラを肩に若きハイカー

山脈の残月仰ぐ田舎駅

古城の辺り包む秋色

われ勝ちに葡萄の房に手を伸ばし

指ふれ合うてはと飛びのく

乱れたる想ひを秘めて黒真珠

通ひつめたる夜の裏道

アパートの窓に映りし月寒く

外は風友と酒酌む

積年の恨みを忘れ「書」を語る

雲から下りて論ず鄧さん

遙かなる大地に満つる億の民

抱く子の持ちし紙の風船

ふる里の花の思ひ出寺の庭

木の芽田楽味噌のおぢよき

屋根裏の雀の雛も巢立ちせり

爺、婆、親子三代の家

渡り初め人の羨む晴れ姿

丘 堂 齋 風 然 舍 堂 齋 丘 舍 風 然 丘 齋

祝ひの餅を供ふ大安

床入りの帯解く気配夢現つ

いたはりつつも眠らせぬ夜

朝蟬の早や鳴く声の聞えける

喉しみ透る清水冷たき

お団子を頬張ってゐる峠道

何ごとおはす古き御社

七十の来し方おもふ月今宵

菊の枕に無病息災

路地の奥煙を立てて秋刀魚焼く

東京タワー見上ぐ客人

高速の道路を走り羽田まで

円高不況に喘ぐ工場

川端は花に賑はふ屋台店

鞆を漕ぐ黄昏の空

昭和六十二年六月三十日

於 興流会 談話室

丘 堂 齋 風 然 舍 堂 齋 丘 舍 風 然 丘 齋

然

風

齋

堂

舍

然

丘

齋

風

舍

堂

丘

然

風

舍

風

舍

風

然

丘

齋

堂

舍

然

風

齋

堂

「俳諧の面目何と何とさくらん……一句

勸進の功德はむねのうちの煩惱を舌の先に

はらって、即応即仏とするべし」これは「徳

を正す」と云うことに、或は通ずるのかも

しれません。つづけて「句作のよしあしは

まがりなりにやっておけ、げにもさうよ、

やよ、げにもさうよの」(路通篇「勸進牒」

其角跋文)は「惟れ和す」の情でしょうか。

又「歌の道は昔の人あまりに執心し侍り

し程に、或は一首に命をかへ、難をおひて

は思ひ死にしたるためしも侍りき。連歌は

さやうの事は侍らぬ事なり。ただ当座の逸

興を催すまでなれば、さのみ執着執心なき

うへ、一座に更に余念なければ、悪念もお

のづから盛りに侍べる事なし」(二條良基、

筑波問答)

そのようなわけで、今年の正月からは、

膝送り歌仙を宗匠交代にて楽しく書いて居

ります。尤も出来のよいのが嬉しいのは、

勿論のこと、今迄に二十韻、歌仙合わせて

やと三十巻近く巻きましたが、要はこれ

からでしょう。連衆は三年間、増えも減り

もせぬ良きお仲間。長老の田原竹無齋さん

がどうこなすかと考えて居られるようです。

(彬風記)

## おくのほそ道紀行

俳諧のたねのこぼれて

### 秋元正江

上野発八時やまびこ41号に、奥の細道連句行の総勢十四名が乗りこむ。発車と同時に例のごとく翁の発句の脇起り二十韻が、席の前から二巻同時にはじまり、車中は忙しい。古川着、「ささにしき」の本場である。直ちにジャンボタクシー二台に分乗。ふとみると町の一隅で注連を回し神主が厳かに地鎮祭を行っている。荒雄川、雪の栗駒を教えてもらい、右手に陸羽東線が走る。尿前の関の入口、大谷川にかかる大谷橋で、長身で着流しの前清風資料館長大類林一氏と御子息のつとむ氏が出迎えて下さる。真青にぬけるような夏空、青胡桃が重って影をつくる。

なるこの湯より尿前の関にかかりて出羽の国に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて漸として関を越す。

関屋のごつごつとした石組の跡に手を置くと灼石のぬくみが腕の芯まで伝ってくる。青田のひろがりに、風紋のような波が騒いで、緑に染まるような眺望のさつき亭で昼食。

日本こけし館見学、鳴子系こけしは、胴が太く安定感があり、頭が特殊なはめ込み式で、頭をまわすとキチキチと涼しい音をたてる。

出羽街道、中山越えは歴史の道として整備され、踏みしめる山道は、いかにも奥の細道のたたずまいである。明雅先生の掌にのった可愛い青蛙は同行を願うのか逃げようともしない。

封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

封人の家(旧有路家)の前に、紅花が沢山荅をつけていた。元禄二年曾良を伴ってきた芭蕉は日暮れて辿り着いたが、猫糞一行は、まだ陽の高いうちに訪う。馬柵や三和土に触れ、夏炉の前、よこ座、かか座を確かめて坐ったのである。

最上紅花は量、質ともに全国最高とうたわれる特産であったが、その産地最上の山形では、花といえば紅花を意味する程で、

「花」の一語だけで紅花をさすところは他にはないと云う。紅花を撞いて固めたものが、花餅、花莖は紅花を干す莖のことをいった。花餅を精製して白磁の盃に塗ったのが「紅おろし」である。紅は小袖や胴着の裏や振りにも使われ、美しいものを内にひそめ、紅に包まれた女の心はぬくもったのである。薬用にもなり、染めくさとなるものは紅藍だけでなく、すべてが薬で毒草では決して染めなかった。ミイラを包んだ亜麻布は紅で染めたといわれた。

紅花の種は清明に播き、紅花半夏一つ咲きとって夏至から十日後の七月一日頃に初咲きを見せる。

封人の家から、笹森、一列を過ぎ、処々で見かける立葵の淡い紅の大輪は、変り易い山の天候をうつつして、ゆらいでいる。手を浸してみたかった麓の泉を車窓から眺めて山刀伐峠へ向かう。

高山森々として一鳥声聞かず。木の下闇茂りあひて夜行くごとし。

この峠は、奥の細道の観光客が車で楽に越せるようになり、降りて旧道を垣間見られるようになった。数年前、夕立に打たれながら登った峠とは、雲泥の違いであ



った。

山刀伐峠の名は、獵師とか仙人が冠る「ナタギリ」に似て、尾花沢に向っての前面の地形は、頗る急斜でナタギリの後部に当り、峠を越すと緩やかになってナタギリの前底に当たると、つとむ氏が木の枝で地面に描いて教えてくださる。究竟の若者、反脇指を携てとは、まさに彼のことであろう。峠からは視界がいつきに開けて初蠅に耳を傾ける。楸邨筆の奥の細道の碑の文字に夏雲が往きかう。蟻塚に誰かがペーミンント飴を供えた。

羽州街道を養泉寺へ。芭蕉はここで七泊。最上三十三観音札所二十五番の観音堂で、

「尾花沢仏の御手の糸すき手にとるからにゆらぐ玉の緒」と御詠歌が掲げてある。

「涼しさを我宿にしてねまる也」の涼し塚があり、ここにも紅花が咲いていた。

尾花沢芭蕉・清風歴史資料館で、手に抱えきれないほどの紅花二束（それは江戸時代からの棘のあるものと、園芸用の紅花）と、園芸品種でない紅花の種を大類氏より頂いた。

又、斉藤孤柳氏も見えられて合流、一路銀山温泉へ車を走らせた。

午後七時半より能登屋の宴会場でNHK

の取材陣が見え、俄かに旅にしあればの正式俳諧二十韻を巻くことになった。のと屋の浴衣姿の宗匠、脇宗匠、執筆が着席、花司の献花からはじまる。県花である紅花を持出し、芭蕉像の替りにと、設営係は花笠音頭の笠を目印に床の間に据え、賓客は大類林一・つとむ父子、斉藤孤柳氏である。

宗匠の「執筆、執筆」の声も銀山温泉に透って、文台捌きも厳かに、二十韻の俳諧興行が行われた。「付け」のかけ声も間髪を入れず、「句有り」と読みあげるや、すかさず「付け」と付けすすみ、カメラは、旅の俳諧の座を移動し、畳に上げられた歳時記、文房具類にもしばし向けられる。花の句を大類氏に乞い、めでたく挙句も定り、九時五十分終了。「付け」と云ったらどんなに気持がよいでしょうと、つとむ氏が感想を洩らされた。このテレビは翌日の昼放映された由である。この後、「清流の間」（おしんの撮影に使った）で膝送り二十韻をまいた。木造三層、四層の旅館が川にそって並ぶ出羽の名湯銀山の朝の散歩に、銀坑洞、白銀の滝、こうもり穴を見学、なかでも銀坑洞は、滴りの中、ここで仕事をした人達を

偲はせるものがあった。

午前九時出発、消雪道路を二台のタクシーで六十里越えである。この辺は日本一雪深い処で、昨夜の俳諧の席に列せられた孤柳氏が電話で場所を打合わせ、明雅先生をお見送りに出られていた。

最上川舟下りは、七月というのに日射しも強くなく風も爽やかで快適な舟旅となる。

白糸の滝は青葉の隙々に落ちて仙人堂岸に臨みて立、水みなぎってあやふし

船頭さんから救命具は前に抱くようにと教わる。青鷺一羽姿よろしく岸に佇んでいる。この天然杉は幹を伐っても別の方から幹が出て、高山峽と最上川だけである。緑に包まれ穏やかな、舟の上に生涯を浮かべての舟下りであった。

羽黒山斎館の勅使の間で昼食、鳥海山、庄内平野が一望できる。ここで、下鉢清子さんの知己、高城金男氏が尋ねてこられ、小雨の中、国宝の五重塔迄、車で御案内して頂き見学することができた。河骨の花が咲く鏡池、大鐘楼も回って鶴岡へ。

致道博物館内の酒井氏庭園で旅の終りのお抹茶を、雨にけがる合歡の花を眺め頂く。

二十韻 四卷

脇起り 涼しさを

涼しさをわが宿にしてねまるなり

かすかに匂ふ白き茉莉花

窯の辺に手びねり皿の並びぬて

豎笛吹いてかろきステップ

パレードの銀座祭りに望の月

親子そろってすす新蕎麦

丹精の厚物咲きの濃紫

三年がかり口説きつづけて

クーパールの鼻が高くてキスの邪魔

シャンゼリゼからコンコルドまで

冬帽をま深にかぶりこつこつと

月を寒げにあれば弱法師

古の恋の夢にもある女時

負けて嬉しい人もありにき

なめらかに湖の夕べを風渡り

鬼ころし汲む木曾の安宿

馬喰の握りあひする袖の中

あとさきになりゆける子遍路

遅咲きの花を詠みたる二十韻

ささにしき炊き鯛の浜焼

昭和六十二年七月十日

於 東北新幹線車中

脇起り 涼しさを

涼しさをわが宿にしてねまるなり

初鯛の遠き枕辺

燈台の真下の海の真青にて

夕月にまだ遊ぶ子供供ら

地藏盆たわしでこする蠟燭

思草咲き曼珠沙華咲き

堪えかねる情抱けばそぞろ寒

じゃれつく猫に袖をからまれ

病む夫を独り残して旅へ発ち

鍋焼うどんかに族のむれ

地下売場大根白く積まれるて

銀の鎖を撰びかねたり

カンダハル馬車より仰ぐ薔薇の月

禁酒の掟つらき単身

見えずとも化粧直して恋電話

さはる首筋ちよっとしつこく

半世紀友それぞれ的生活せり

いつしか消えし春の淡雪

千木高く囀る鳥も花の中

岩出の山に逢つむ人

昭和六十二年七月十日

於 東北新幹線車中

正式俳諧 尿前や

尿前や風に渦まく青田波

馬柵の匂へる梅雨明の土間

子供らの犬の仔抱いて集ふらん

耳に親しきミュージック聞く

まだ尽きぬ話一言月の道

秋祭り笠自墮落に掛け

てんぶらの紅葉のうまき時にをり

三角四角清算のわな

温泉と金と恋とを掘り当てる

いま空いてゐる宰相の椅子

鬱病の人に親しき冬の蠅

六歌仙てふ熱爛に月

愛し合ふまどろむ暇もなき程に

虚実皮膜の女心よ

更紗着てポロブドールの石のひび

音なく汐の杭に打ち寄せ

毎日が日曜となる父となり

ふらここ揺らし落す古靴

水窪む花一片のある重み

黄蝶白蝶消ゆる山陰

昭和六十二年七月十日

於 尾花沢 銀山温泉能登屋

明雅

孝子

正江

麻子

徒司

和子

貞子

江

司

和

孝

和

孝

和

孝

和

孝

和

孝

和

孝

林一

執筆

膝送り 青胡桃

青胡桃みな背のびして触れにけり 孝子

夏の座敷の開けて広々 麻子

こはせ二個おてだまに入れ縫ひ上げて 和子

耳うごかして愛想する犬 澄子

ちどり足肩抱きつつ月の下 好敏

吉のおみくじ萩に結びし 郁子

鉄輪まふ舞台の冷えてこの別れ 正江

「紫雪」は不老長寿菓なり 徒司

行く年の瀬の音絶えずお湯の邑まち 正雄

パイオ野菜の季節わからず 啓世

オオバンコンで稼ぎし金でシャトウ買ひ 杉亭

練堀小路で育つ江戸っ子 哲

唐棧の縞を極に着せて泣き 孝

ほとぼりさめてひそと縁づく 麻

水槽の鯉料って宵の月 和

ペンギン・パンダのビールよく売れ 澄

オウ牢名主三枚重ねしかと座し 江

種紙を選る左利きの手 敏

花の山はるかに塔の見え隠れ 郁

人間万事塵なる中 司

昭和六十二年七月十日

於 尾花沢能登屋清流(おしん撮影の間)

◎ 質疑 応答 ◎

問 発句に紫陽花の「花」の字を使ってもいいのですか。

答 発句にある字は、なるべく使わないというのが一般のならわしです。これは発句の光りを消すからと言われています。けれども一巻の中には、必ず正花がありますから、それと差し合わないよう

に、発句に「紫陽花」の「花」の字を選られたこと、一応御尤もですが、発句に季節の花を詠むこと、たとえば「紫陽花」・「菜の花」・「卯の花」など詠まれることが多いですね。それらを一つ一つ制限すれば、作品が作れなくなる恐れがあります。これと同じのが月で、ムーンでなくマンズの月が発句に来ることがよくあります。これも禁ずることは不可能でしょう。だから、紫陽花の場合も、できたら「あぢさる」または「あぢさるの穂」などで花を避ける心懸けはやるべきでしょうが、絶対に「紫陽花」を使っ

てはいけないとはいえないでしょう。結論として「紫陽花」という語がその場合

一番よいと判断されたら、遠慮なくおつかい下さい。発句が正花の場合は、花の定座には、それに代わる桜・桃・梅・柳などを用いるのがよいと思います。

問 表四句の中に「利休まんじゅう」・「小倉羊羹」などの語が出ました。これらの固有名詞はいかがでしょう。何か例がありましたらお示し下さい。

答 利休まんじゅうは確に目につきますが小倉羊羹はそれほどではなく、たとえば瀬戸物というほどの感じがします。だから小倉羊羹でなければならぬというのならば使ってもよいと思えますが、この作品では打越に「土地の訛り……」という句があるので小倉羊羹はいかがでしょうか。「羊羹の味」の方が四句目ぶりとしてもよいように思えます。「利休」も古い有名な茶人の名として一般化されています。芭蕉の百韻「日の春を」の巻の第三に「雪村が柳見にゆく棹さして」と、室町時代の有名な画家雪村の名を表六句の中に出している例もありますから、それに準じて考えてよいでしょう。

## 暮雨巷に由縁の

### 衆と俳諧興行

## 式田和子

昔女はらから住めり杜若  
いざ言問はむ来れ郭公

晝臺仏  
和子

昔、暮雨巷には私の両親が住んでおりました。ここが晝臺の住いであつたことを知らなかった不肖の娘が、やっと知ったきっかけをお作り下さつた東明雅先生と、猫藁会の方々をご案内して、暮雨巷に参り、連句興行と致しました始末、いざや言問ひ申さんーと、つい力みましたのは、私も両親没後訪れますのが二十年振りだつたからでしょう。

五月十九日、好天。九時発の新幹線は二階立てなのですが、恒例の付回し二十韻がありません、発句は、

名庵の蘇る日や風薫る

明雅

この車中二十韻は、明雅先生ご持参の「中興期俳諧の研究」(桜楓社)の箱に、記念だ

からとおっしゃるのに甘えて、それぞれが書かせて載きました。

二階を覗く暇もなく、十一時名古屋着。

駅頭で勢揃ひした一行は、猫藁八名。名古屋の俳諧「耕」主宰加藤耕子さん他三名。

豊田市の「ころも俳諧」代表矢崎藍(柴田竹代)さん他七名で車に分乗し約五十分。

巷の車回しに着きますと、べんがらの築地に填込んである瓦の古び様も変わらず、その上から万緑滴る風情でありました。

町家造りの玄関から晝臺旧居座敷に荷物置いて載き、暫く庭や建物の中を自由に見て載くことにし、隣に住んでいる義妹(鈴木隆子)の心盡しの茶席は庭から入って載くようにし、散策用の白緒草履も並べられた頃、西尾市から「白桃」代表、画家の斉藤吾郎さんが、車に積んだ宝物・連句俳画扁額を持って到着されました。

晝臺旧居部分主座敷八帖、隣六帖、旧玄関六帖を通して机を並べましたが、主座敷の床は、

床飾り名工作る皿ありて

慶子

でなく、晝臺と蕪村が龍門時代の暮雨巷で向き合つて話をしている画(鈴木蔵)で、庭先に蟹が画いてありますのが御愛嬌、有

名な蟹の句を踏まえてのものでずつと後期のものと思われます。作者は山田秋衛。

夕雨や岡に出揃ふ蟹の穴

晝臺

この軸は別の茶室に掛けてあります。(東海銀行蔵) 花は座敷大山蓮華。

さて、頃やよしと四席に分れて興行を始めましたのが一時。発句は明雅先生が晝臺の句の中から選んで下さいまして、各捌きは好みの句を載き、脇起り二十韻。

明雅先生席・連衆、吾郎(白桃)、藍、正子、聖子(ころも俳諧)

かげろふに揺らるる芥子のひとへかな  
加藤耕子(耕)席・連衆、正江、麻子(猫藁)時代、治子(ころも俳諧)

若竹や一字の灯深からず

坂本孝子(猫藁)席・千町(猫藁)、しげと(都心)、都美子(ころも俳諧)沙衣子(耕)かげろふに揺らるる芥子のひとへかな

式田和子(猫藁)席・淳子(猫藁)、志津枝、慶子(ころも俳諧)、寿子(耕)

昔女はらから住めり杜若

脇はそれぞれ捌きが載きましたが、まだ連句三昧とは申せません。当日は名古屋の方々の肝入りで、天明期以来二百年振りの暮雨巷連句興行というフレーズから、NH

K、名古屋テレビ、朝日、中日、読売新聞が取材に入られました。明雅先生はそちらに連句の話をなさり、連衆もインタビュを受け、句も作り、お弁当も並び、御酒も少し忙がし過ぎますので、

珈琲豆を手挽きする人

淳子

閑を求める句を載しました。このあたりから各席落着いて、一巻に一句は名古屋弁を入れたいという凝った趣向の席など様々。私の席はビデオ撮りの進行の都合で、もう一度第三の付けに戻り、捌きを連衆との丁々発止のやりとりを撮りたいということで、ちょっとやらせをやらせて載しまして、O Kのサインが出されたところで思わず連衆一同拍手。普通一巻首尾しますと拍手しますので明雅先生はるか彼方から、

「もうあがったのオ」

などという掛声も連句席ならでは的一幕で、このテレビは当日夕方放映され、朝日、中日新聞は翌日の朝刊に掲載されました。

四時には巻きあげて欲しいと申上げてありましたが、落語の小言幸兵衛のように、やらせを勤め、お酒は「子の日」お味は如何とご機嫌伺いに出向き、取材のお弁当は渡ったかと台所の督促をし、和子席が最後

になりましたが、定時には各席披露することができ、面白い面白いと拍手。

暮雨巷に由縁の人と巻く歌仙

寿子

これぞ連句の醍醐味ではないでしょうか。

ここからの眺めが暮雨巷の名の由来であるといわれている回り廊下の高欄に集って記念撮影。もう一枚は庭の隅に、表通りから見えるように建てられている石碑（暮雨巷）に集ってパチリ。

想ひ出ひとつ残りゃよい恋

慶子

想ひ出ひとつ皆様に残して載しまして、五時の新幹線で帰京致しました。

処々に引用しました句は、和子捌の二十韻の中の句で、発句通り、姉と私、二人娘

慶子

がおりました不思議、それをお示し下さいました明雅先生の御縁を何とか盛りたいと思いましたが未熟な一巻は次の通り。

脇起り二十韻 杜若

式田和子捌

昔女はらから住めり杜若  
いざ言問はむれ郭公  
床飾り名工作る皿ありて

和子

珈琲豆を手挽きする人

淳子

見なれたる教会宵の月かかり

寿子

帰り辛さにちろ虫聞く

志津枝

そぞろ寒ワイシャツにつく紅の濃し

慶

青の時代の三角の顔

淳

二階から堂と目葉揺れる竹

寿

居座り猫の毛並艶やか

枝

あどけなく寝たる子重き酉の市

淳

酔へば管まく鯛焼に月

枝

外国の土産を配る算段も  
想ひ出ひとつ残りゃよい恋  
じつとりの男臭さが身上で  
長距離電話小銭ちゃりちゃり  
暮雨巷に由縁の衆と巻く歌仙  
春の恰に伊勢の型紙  
山々はぬくく静かに花満つる  
陽の麗かに木馬回転  
長距離電話をちゃりちゃりと往復させつ  
つすべてに心入れをしてくれた義妹が、亭  
主も勤めてくれた茶席の軸は（東海銀行蔵）  
道よくつとむる時は名從て四隅にわたり  
人よく和す 和すればよく人を益す よ  
くつとめて風雅と信をわすれされと也  
天明七丁未春 暮雨巷 曉臺  
まことに、今回の連句興行はかくの如し  
でありました。

暮雨巷 二十韻

かげろふに 東 明雅 捌

かげろふに 坂本孝子 捌

若竹や 加藤耕子 捌

かげろふに揺らるる芥子のひとへかな 暁臺仏

かげろふに揺らるる芥子のひとへかな 暁臺仏

若竹や一宇の灯深からず 暁臺仏

薄暑の庭のこどもらの声 明雅

遠くつらなる初夏の山 孝子

夏蛙聞く遠きまなざし 耕子

駐在員僻地は僻地楽しみに 聖子

硯彫る音颯々とひびきゑて 千町

旅硯墨ゆつくりと磨られるて 正江

名のみ知る人出会ひうれしく 正子

ガラス戸越しの声は何鳥 しげと

厚切り羊羹藍の染付け 治子

海をゆく月のゆらりゆらりにて 吾朗

月光の小さき社に詣でけり 沙衣子

ピル工事起重機吊すごとき月 麻子

酸漿ならす女房立膝 竹代

児までなしたる妻よ葛の葉 町

夜学子カバン揺らしゆく怪 時代

新酒の香焦がれし思ひぶちまける 正

新走りなれぬ着物の裾みだし 都美子

十代はゑのころぐさと同じ恋 同

仏も迷ふ煩惱の道 代

訛は浪速王手飛車取り しげと

あした別れがきてもいいのよ 治

横貌がヴァスコダ・ガマに似たる人 朗

停電にパソコンソフト全部消え 町

最上川海にそそげる岸に佇ち 江

緊張すると鼻毛抜く癖 聖

老愁つゝの時雨くるころ 沙

霧氷とがりし柏手の音 治

銀行を襲ふ話も神の留守 朗

店先の狐の毛皮にらみつつ 都

猫相伴酒は「ねのひ」のならび膳 江

寒月の下ギロチンを研ぐ 聖

内需拡大母の懐 同

江戸では云はぬ「だちゃかんは」とは 麻

ぶち猫の碧き瞳の謎めきて 正

無口とは言へ読むものにポルノ本 同

置き忘れ目鏡おでこにかけたまま 治

読経の鉦が両隣より 聖

惚れては破れ破れては惚れ 沙

ハーンの書きしスノーウーマン 江

初めての恋はめのとに教えられ 代

噴水の底にきらめく月の青 町

居待月株券どさりと出す男 江

ゲーテの愛で八十を越え 聖

ナポリもみしがまだ逝けずとか 同

ひもも養ふひややかな女 麻

宇宙人しみじみ合はず指と指 朗

「暮雨巷」に茶をいたたくも縁なる 孝

秋の日のアイロン蒸気手に触るる 代

春の愁はひとり旅こそ 代

幸晴れてしらす干しなど 同

ゆつくりとつく試歩のステッキ 麻

金の鯨きらめく城の花吹雪 雅

花ぶき乳母車の嬰あくびして 町

竝びたる鯨に舞ひ舞ふ花ぶき 麻

いつの間にやら炬燵ぎのころ 正

てふてふとまる竹垣の先 沙

舶来時計かぎりひて打つ 江

第二十二回猫蓑会

二十韻 九卷

参加者二十八名

昭和六十二年七月十五日  
於・関口松声閣

未草 氏原正雄 捌 紗献上 大窪瑞枝 捌 合歡の朱 式田和子 捌

水音のかそけきひびき未草

正雄

久闊の衿ややつめし紗献上

瑞枝

尿前の関の礎石や合歡の朱

和子

とうすみとんば休めたる翅

正江

枝ひろげたる門の青桐

清子

遠く近くに聞ゆ郭公

弘子

よもすがらこけしの胸に彩さして

徒司

ワインゼリー軽きワルツを口の端に

東夷

もてなしの秘蔵の皿を取り出して

遊

待ちわびをれる濡縁の月

香

リボンを結ぶブードルの髪

孝子

卓につかまり立ち上る嬰

好敏

風の盆男踊りの振りの佳き

江

中天に月泳ぎ出る雲間より

孝

隠し芸こっそり習ふ月の暈

同

ふれて別れてやや寒の袖

雄

鞍馬火祭り裸身まぶしく

孝

仕残した恋を数へるうすら寒

遊

新酒からいよよ値下をするらしく

司

うそ寒の修正液で消せぬ仲

清

運転免許書き替えに行く

和

店舗改造若き二代目

香

B MW直線の道

孝

突然にサイレン響き救急車

敏

チェロ弾いてロストロボピッチチェロとなり

江

古渡りの高麗茶碗羨好み

夷

新厄年の社長就任

弘

天才心理解くに術なし

司

瞳靜かに癌告ぐる医師

孝

股火鉢して鬼どもの追儼待つ

同

築地より人力に乗る冬の月

江

悲しみの汚れしままに雪つもり

夷

峠月牙ゆほろ酔の足

弘

葛湯をふいてひもを養ふ

香

荒鷹の檻月の照らせる

清

飴のぼしたるごとく川面淀みぬ

遊

ほてり合ひ今は息さへたえだえに

司

ジャンジャラと太棹の絃叩きつけ

夷

抱きしめし猫細く鳴きたる

和

幸せでしたと一行の文

司

小指の先の初めての紅

夷

だめだめと言ひつつ何時か熱くなり

弘

蘭亭硯裏くつきり彫ってあり

江

女郎長若い男をなめ尽くし

夷

乱れ箱には紐の幾筋

遊

囁めば煙草の嫌になるガム

司

ゴールド・カード次々に出す

夷

南蛮の古代裂あり正倉院

敏

鶺鴒追ひて老の散歩の万歩計

江

縮緬の座蒲団贈り喜寿の祝

清

恩師専門蝶の分類

敏

ポートルースの抜きつ抜かれつ

司

淡き春愁悔いるともなく

孝

依万智「サラダ記念日」花夕餉

遊

錦絵の花見もかくやさくら橋

江

夢にまで花降りてをり暁の闇

枝

春飛魚に化粧串打つ

遊

うららうららと塔影のゆれ

香

尾をなびかせて蛸蚪のひと群れ

え

敏

梅雨早

杉戸金一

捌

紅蜀葵

高瀬美保

捌

巴里祭

中川 哲

捌

雑草の青く伸びるや梅雨早

金一

背のびして遠き空見る紅蜀葵

美保

なにごともなく過ぎてたり巴里祭

哲

ふつくら眠る棚の二番蚕

杉亭

夏茜とぶ家々の庭

雅代

軒にひらりと入る夏燕

元子

山の宿団休客は賑かに

明雅

民謡の練習らしも声のして

麻子

板前の庖丁捌き鮮かに

隆秀

カチカチ鳴らすワイングラスを

久美子

残る下町きはふ若衆

彬風

けふは静かな婆と三毛猫

澄子

満月にネオンサインの色あせし

あかり

新蕎麦の暖簾新し十三夜

風

姫川に秘めし翡翠を照らす月

啓世

麻疹のやうな露の初恋

同

この頃少し彼女冷やか

風

七夕笹に並べ書きし名

元

縫ひ上げて久女の贈る菊枕

亭

マザコンは嫌い鳩笛吹くばかり

代

秋小寒彼の上着にくるまれて

同

忘れ難きは切れし毗

雅

ひそかに熟す酒倉の樽

保

マリアッチ聴きテキーラを呑む

世

竹下さん派閥抜け出す胸張りて

子

山刀伐の峠を過ぎて尾花沢

子

総会で挨拶したり新社長

秀

崇洋媚外胡氏の失脚

亭

牛の背中にねむりたる稚児

代

立って寝るのも芸の内なり

世

粉雪に座敷童の笑ひ声

り

雨乞ひの歌の碑もあり境内に

風

禪寺の森閑とせるたたずまひ

秀

狸が化けし三角の月

雅

鯛焼買ってかじる月道

子

電熱器にてあぶる干魚

澄

ちゃんこ鍋今日の仕込みは早々と

子

ポーナスの行方は知らず右左

代

月冴えて霜焼の手のおさんどん

秀

寄りし背中にスキとまた書く

り

愛は真実贖のダイヤも

同

個室休憩時間厳守よ

澄

老人の見合いパーティーあちこちで

子

天国か地獄かふたり共白髪

保

エーゲ海池田満寿夫の交歓図

哲

じっと見守る運命の神

雅

時速百軒とばす高速

風

童話の終り何故か悲しく

元

比叡山千日廻峰とげし僧

り

鳥つなぐ橋架かりゆく朝ぼらけ

子

死てふもの再生と知る老いの日々

秀

春寒の笠大空に捨て

雅

思はぬ方に春の虹たつ

保

路の臺剥くはぢらひの紅

世

端溪の摺り音かすかに花曇り

子

面売りの口手八丁花吹雪

代

虚空より舞ひて神苑花吹雪

元

水琴窟に生まれたる蝌蚪

亭

囀りて休む掛け茶屋

風

黄蝶白蝶子らの追ひゆく

澄

余興三卷

従来、七月の猫藁会は溽暑に耐えながら興行するのが常であったが、今年は松声閣が冷房化して、別天地のように涼しくなったので、一応終了した四時半ごろの後も、興覚めやらす多くの人が残って、さらに三巻ができた。その作品は次の通りである。



麦酒注ぎ 副島久美子

捌

紅蜀葵

膝送り

巴里祭

膝送り

麦酒注ぎ松声閣に遊ぶ宵

心たかぶり利かぬ冷房

二十韻昭和の連句目指しゐて

日々の出来事書留むる友

雲のへり染めて出でたる望の月

枕辺にきく秋の潮騒

おくんちでやっど叶ひし浮気虫

羽織隠して袖ひき止めて

香港島偽のルビーをつかまされ

社長若死世代交替

石路の絮を追ひつつ駆ける子等

夕月上る歳晩の町

ゲイバーのナンバーワンで身がもたず

蝮酒でもだめな昨今

泥美容指圧療法してもらひ

猫欠伸して片薄眼開け

新聞の株価欄だけ読む日課

蓬餅には粒餡がよし

三重の塔に触れる花の枝

霞の奥に空のひろがる

紅蜀葵剪り兼ねてをり朝まだき

遙か彼方に峰つくる雲

ナナハンの暴走族のたむろして

何を入れるか頭陀袋提げ

鈴を打つ後生大事の月明り

女の嘘のしみるうそ寒

温め酒酌み交したる四畳半

猫がご機嫌伺ひに来る

遠山の金さんを見る昼下り

坑夫哀れや銀坑の跡

波頭くだけ飛び舞ふ冬鷗

村浄瑠璃の寒声の月

したたる血戸板返し裏表

去年の服からお札みつかる

悩ましいジャパゆきさんとラブホテル

ピデオ通りに出来ずふられて

黒々と黒木香の腋の黒

頬杖つきて春愁の窓

よき姿の花にあひたり相馬野に

山しじみ蝶浜に鯛網

和子

杉亭

隆秀

啓世

澄子

和子

亭

秀

世

澄

和

亭

秀

世

澄

和

亭

秀

世

澄

靴下に蝶の縫ひ取り巴里祭

シヨウインドウにエンゼルフィッシュ

子供らはパソコンじっと見つめるて

伸びせし猫につられ伸びする

磴をふみ鐘撞にゆく月の庭

梶の葉にある秘めし人の名

雁瘡をうつけし女懐しく

七味が利きし素うどんの汁

終列車暗く尾燈が消えて去る

何の事とも知らぬおふくろ

トラキチは勝った球場去りやらず

「清岡卓行」詩集つんどく

風の北京天壇月凄し

ずいずいずいづい構走りゆき

我ひとり世界人口五十億

赤い酒酌む狂と天才

彫刻の森に山あり水ありて

春の愁にひらきたるメモ

踊り出る一つ目小僧花篝り

相乗り自転車どんたくの頃

明雅

清子

好敏

元子

よしゑ

正江

雅

清

敏

元

江

雅

清

敏

元

江

元

清

清

再版 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

東京堂出版

定価三五〇〇円。

沙羅の会

膝送り

二十韻三卷

昭和六十二年七月一日  
於・京橋区民館

沙羅の昼

咲きつづく沙羅ほの白き真昼かな

梅雨明けを待つ軒深き部屋

ランリユック背にゆする子賑やかに

泥足の犬まつはりて来る

脱ぎ散らす衣そのままに月浴びて

ままならぬ身に秋風のしむ

檀紅葉やっとかなひし歓喜仏

岩越す水の音のひそやか

「豆子郎」懐かしみつつま茶たて

電話で商売横着な奴

寒月に音遠さがる救急車

酒を爛して「グルメ」カンヅメ

向ひの娘あらはの膝をピチと締め

あっけらかんとばらすあのこと

マドンナの黒きはどきを壁に張り

雀にパン屑留守番の母

死神と貧乏神を友達に

芦の角でて日差し眩しき

送り出す越荷に花の舞ひかかり

つかずはなれずついてくる蝶

貞子

正雄

淳子

麻子

東夷

久美子

貞

雄

淳

麻

久

夷

雄

貞

麻

淳

夷

雄

淳

久

沙羅咲く

白淡く沙羅咲き初めし大樹かな

所在無さげに端居する人

漆塗師伝統の業厳しくて

籠の鸚鵡の声はソプラノ

盃の小さな月をそっと飲み

夢二の女蚊帳の別れに

踊り子の輪に忘れ得ぬ娘を見つけ

ヒンズー神の愛の石像

バザールに満ちてはげしきハングル語

島の見えくる海沿ひの道

寒見舞傘寿の翁門に佇ち

凍鶴の背照らす月あり

鼠講元締めちよっと猫糞し

トランプ占ひ上上の吉

中年の恋は仲々燃えつきず

心中の果風葬の山

閑居して不善をなして郷土史家

円山公園芋棒の味

薄墨の花の盛りに出会ひたり

蚕つまみて指に這はせる

正江

杉亭

千町

啓世

弘子

江

亭

町

世

子

江

亭

町

世

子

江

亭

町

世

子

合歓

合歓ほのと降りみ降らずみ行潦（はたはた）

まひまひつぶる歩む厨辺

峠道はるかに見ゆる窓あけて

先づはいっぶく良とり出し

月そだつ踊り太鼓を習ふ間に

おめざなんぞとやや寒の婿

秋鯖の好きなヤングのワンルーム

ぽっと出て来てすぐ垢ぬけ

銭湯のくぐもり響く桶の音

南無阿弥陀佛選挙よろしく

百年忌果てて献酬菓喰ひ

スノーチェーンの光る織月

パミールを越ゆるキャラバン影を曳き

宝石筥に秘めし想ひ出

母恋ひの惚れては棄つる肌の味

暑いからとて閨を遠ざけ

「久生十蘭」撰集ならぶ棚の塵

春惜しみつつありく休日

路地裏のかごめかごめに花の散る

菜飯の膳を囲む灯点し

和子

哲

彬風

遊

孝子

和

哲

風

遊

孝

和

哲

風

遊

孝

和

哲

風

遊

孝

連句会案内

●連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 関口芭蕉庵  
文京区関口二ノ一ノ三  
(電) 九四一―一四四五

●柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)

●A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜  
午後一時～三時

会場

新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター

●猫藪会 (会員制) 年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一―九六四九

雁帛往来

▼式田和子さんの肝煎りで杉並区四宮の集会所で、連句の講習会が月二回ひらかれ、講師として四回出席したが、猫藪のお仲間も多く楽しかった。今後も続く予定である。

▼七騎の会は幹事役の大畑氏の尽力で、毎月順調に運営されている。但し、八月はお休み、連衆は佃祭を見に行く由である。

▼七月十日・十一日、猫藪有志十四名は「おくのはそ道」の尾花沢を訪ねた。(一八頁参照) 土地の方々、ことに大類林一さん・つとむさん。それから、新庄の斎藤孤柳さん、羽黒の高城金男さんらの御親切が身にしみ、よい体験をしたが、一切のお世話を引きうけて下さった秋元正江さんに深く感謝する。

▼七月十八日、過日の亀戸天神藤祭りに来賓として御出席された久保田月鈴子さんの「富士ばら」の百舌記念パーティがマツヤ・サロンで行われたのでお返しに出席した。折から同人会長として総理の中曽根康弘さんも見えられたので、同氏と連句について特に、中曽根さんの御親戚で大正・昭和期の俳諧師中曽根夜荘氏のことなどの話をした。

▼電通の吉田憲助さんが「二十韻カード」を作って下さった。大変ありがたく、早速同好の人にお頒けしてよろこばれている。

▼季刊「連句」に対する御意見、あるいは自由な随筆などをどんどんお寄せ下さい。四〇〇字×九〇〇字程度、取捨は編集部にご一任下さい。

季刊「連句」 第十八号

昭和六十二年九月一日発行

編集人 杉内 徒司

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二二 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 侑岩田印刷所

▽277 柏市豊住一ノ一ノ二二

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価

一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B6判

三五二頁

三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのようなように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 例句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人  
まで二七〇人の古典的かつ伝統的  
な名句一〇〇〇を収め、豊かな実  
作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代  
表的な俳人五〇五人の代表作一四  
六八句を収め、公平に客観的に鑑  
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をも  
ツグ・不快指数などまで収録し、  
春夏秋冬の四季に分類した。気象  
学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日で  
は意味や表記が難解で正しい解釈  
や鑑賞ができない。本書はそれら  
の季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一八〇〇円 国語学会編

国語慣用句大辞典 A5 六八〇〇円 白石大二編

国語慣用句辞典 B6 三三〇〇円 白石大二編

国語史辞典 B6 三三〇〇円 林巨樹他編

日本語 語源辞典 B6 一八〇〇円 堀井令以知編

京都語辞典 B6 一八〇〇円 井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇円 天沼 享編

隠語辞典 B6 三三〇〇円 煤垣 実美編

近世上方語辞典 A5 二五〇〇円 前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 三三〇〇円 藤井宗哲編

明治新語俗語辞典 B6 二五〇〇円 権島忠夫他編

難訓辞典 B6 三三〇〇円 中山泰昌編

名乗辞典 B6 一八〇〇円 荒木良造編

名数数詞辞典 B6 四四〇〇円 森 陸彦編

あいさつ語辞典 B6 一〇〇〇円 奥山益朗編

新版 こぼ遊び辞典 B6 五八〇〇円 鈴木業三編

類語辞典 B6 一八〇〇円 鈴木 広田編

類義語辞典 B6 三三〇〇円 徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 四四〇〇円 藤原亨一他編

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円 神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2